

アトリエ 琉游舎 だより 214号

アトリエ琉游舎 ryuyusha.com/琉游舎for healing <https://toi101izuru.wixsite.com/mysite-3>

2025年9月24日発行

生姜なければ茗荷がある

(仕様がなければ茗荷がある)



○「仕様がなし」の「しょうが」に「しょうが（生姜）」を掛けて、そこに「茗荷」を加えることで「生姜がないなら、茗荷がある」と薬味の名前を使った駄洒落、言葉遊びです。素麺の薬味に生姜を切らしていても、茗荷があるからなんとかかなるということでしょう。転じて「どうしようもない状況でも何らかの手はある」と前向きに捉えることもできそうです。秋の茗荷は彼岸前後が収穫時期です。我が家の前庭も茗荷の最盛期、薬味は何とでもなります。

○近年の猛暑続きで、彼岸過ぎでも暑い日がありますが、茗荷に限っては毎年計ったように秋分の日を挟んだ一週間に必ず収穫となります。肥料も草取りもしないで、ほったらかしでも毎年確実に大量の茗荷が取れるので、経済的だけでなく、冷凍にして一年を通して薬味として使用できるので、元手いらず、手間いらずの大変な孝行作物で重宝しています。

○お釈迦様の弟子の中に、周利槃特（しゅりはんどく）という、物覚えが悪く頭の弱い者がいました。物覚えの悪い彼にお釈迦さまは「塵を除く、垢を除く」と唱えさせ、精舎を払浄せしめ、彼はそれにより落とすべき汚れとは、貪、瞋、痴という心の汚れだと悟りました。すべての煩惱を滅して、阿羅漢果を得たのです。彼は自分の名前も忘れるため、釈迦が「槃特」と書いた旗を背中に背負わせてやったのですが、それも忘れてしまい、死ぬまで名前を覚えることができなかったといひます。周利槃特の死後、墓から見慣れない草が生えていて、そこで「名」を「荷う」ことにちなみ、この草を「茗荷」と名付けたともいわれています。

○物覚えの悪い周利槃特はついには阿羅漢（悟りを得たもの）となり、茗荷の名付け親にもなりました。名を荷い（茗荷）後世に名を残したのです。一方「茗荷を食べると物忘れをする」という俗説があります。物忘れの科学的根拠はなさそうですが、周利槃特の故事からの説か、あまりの美味しさに人にはあげたくない、独り占めしたいとの気持ちから出た説か分りませんが、「茗荷なくても冥加がある」ならよいでしょう。※冥加：気がつかないうちに授かっている

神仏の加護・恩恵。

9月・10月スケジュール

			木	金	土	日
			25	26	27	28
火	水					
29	30 読書会 13時半から	10月1日	2	3	4	5 写経会 13時半から
6	7	8	9	10	11	12
13	14 読書会 13時半から	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26

読書会

9月30日（日）
10月14日（日）
13時半から

写経会

10月5日（日）
13時半から

ついに猪が我が家の庭を闊歩するまでになりました。昨年辺りから畑の被害、道路脇の土を掘り起こした跡、深夜の獣の声、目撃情報など、猪に関する話を頻繁に聞くようになりました。家の北側道路を挟んだ山に仕掛けられた箱罠にこの一年で計五回、九頭の大小の猪が捕獲されていました。いずれも深夜に罠に捕らえられ、逃げようと暴れる音に気付いた早朝に捕獲されている姿を確認していましたが、人間界侵入の一線だけは越えないでいたのです。しかし今回は明るい内に堂々と人の住む家の庭を横切り、平然とさらに奥の人家の方へと向かう光景は、驚き意外の何ものでもありません。それは実に堂々と恐れを知らない姿でした。

猪は夜に活動するもの、人家には出没しないものと思っていましたがその通念を、すっかり否定されてしまったのです。時は9月半ばの夕方5時、猪には暗く感じるのかも知れませんが人の目にはまだ明るく陽の残る刻限です。通過した所は、アスファルト道路を横断、玄関に繋がるコンクリートの階段へ、和室の横の砂利を敷き詰めた狭い通路を通り、明かりをつけたばかりのリビングのレースのカーテン越しの前庭を臆することなく悠然と通り過ぎたのです。その姿を私は直接見ていませんが、妻はスマホを見て目の隅に何やら動くものがあり、また猫かと思い立ち上がると、それは猫や狸より遥かに大きい猪だったとのこと。慌てて琉游舎の私を呼び戻している間に写真を撮るタイミングを失い、やってきたときは20メートルほど先の草むらで、何かを漁っているような姿だけを写真に収めることしかできませんでした。窓を開ける音や妻と「あっ、そこにいる、隣の家に入っていく」などの会話の声も聞こえていると思うのですが、慌てて逃げ出すこともなく、居住区域のさらに奥の方へと去って行きました。まるで自分の縄張りを巡視するかのよう。

最近の猪の急激な人間界への侵犯は、何を意味しているのでしょうか。本来、人を恐れ、極力避けて生活しているはずの野生動物が、人の生活領域に入り込み、恐れることなくまるで人が存在しないかのように歩き回っている光景は、「人は恐れるに足らず」と侮ってのことか、山の食べ物より豊富で美味しいものを人間界で見つけたのか、かつての住処を人間たちに奪われた猪の国土回復運動なのか、人界で共存して生きていくことは可能だと猪が思い込んでしまったのか、いずれかも知れませんが、それら全てが理由かも知れませんが、私にはそれを断定する材料がありません。ただこの現象が一時的なものとは思えません。いずれ畑だけでなく人的被害もあるのではと警戒しながら、猪対策を取らなければならなくなるはずです。これからは人が猪の存在におびえる番です。これは最近頻発する熊と人間の不幸な遭遇も同根の現象だと思われます。

恐れ、感情を失った存在はいずれその存在自身も失うことになるのでしょうか。私たちは恐れ、感情から危険か安全か、闘争か逃走か、屈服か抵抗か、などの生存のための選択を行ってきたに違いありません。未知の他者との遭遇は、懐疑や恐れなどの排除の感情からまず始まるはずです。決して友愛や協和などの共存感情から始まることはありません。私たちは無造作に握手の手を差し伸べたその瞬間に財産や命さえ奪われるかも知れないとの恐怖から始まることで他者との関係性を作ってきたのではないのでしょうか。共存は恐れ、感情から営々と積み上げてきた生き物の、生き続けるための智慧の成果だと思うのです。その様に考えることからもう一度他者との関係性を作り直すことが必要だと私は考えます。まず私でない他者を恐れること。

未知の他者との遭遇が、恐れや拒絶の感情から始まり他者は私と異なるものであると認識していく過程で、他者は私の到底理解と力の及ばない何かを持っていると気付くのです。その時、恐れ、感情は畏怖へと変わるのではないのでしょうか。恐怖が単なる恐れではなく、それをもたらす巨大な存在（力）が恐れ、正体だと知るのです。私たちはその人智人力では捉えようのない存在に頭を垂れ、手を合わせ、恐れ畏まるのです。私たちは自分にはない他者の存在（力）を知るとき、その存在を認め畏怖します。その存在を私はカミと呼ぶことを憚りません。日本人は他者に人智人力の及ばない力を観ることで自己を認識してきたと考えます。森羅万象、山林川河、生きとし生けるもの全てにカミが宿っているのです。他者への畏怖（カミの認識）はまた自分のありのままの存在がなんであるかを認識することなのです。逆に他者への恐れ、感情を失ったとき、恐れは侮りや無関心となり、他者は自分にとって存在しないものとなっていくでしょう。それは他者にとっても自分が存在しないことであり、ひいては自分自身が何ものでもない存在の無化をもたらすのです。

今私たちの生きる世界は、他者が存在しない世界へと変容して行っているような気がしてなりません。他者に対する恐れと畏怖から始まる他者への尊重と共棲への願いは、私が何ものであるか、他者は私にとって何ものであるかをありのままに観ることを可能にしてくれるはずです。ところが今、畏怖の対象である他者を私たちは自ら無化しようとしているように思えます。野生動物が恐れや排除捕獲の対象であったものから、いつの間にか愛護の対象となりました。年長者は長老と呼ばれ畏怖と知恵袋の対象でしたが、今では勤労世代に年金と福祉で面倒を見てもらう存在です。政治家や役人は私たちのためによりよい世の中を作ってくれる役割から、私たちの生活を規制し権力を維持することが目的の存在になりました。学校の先生は知識と社会性を教育する役割から、保護者に代わって子守りをする存在となりました。私たちは動物や年長者や政治家や先生などの自己ではないあらゆる存在に対して畏怖を覚えなくなってしまったのです。そしていざ他者が自己にとって不都合で不利益な存在になったとたん、他者を嫌悪し排除しそして恐怖するのです。しかしその恐怖は決して畏怖に代わることはないでしょう。侮りや無関心の精神から生まれた恐怖は闘争か逃走しか生じないのです。原始、人が森羅万象あらゆる他者（異界）に遭遇したときの驚きと恐怖とそしてそれが畏怖に変わり共棲の願いへと進む歩みを、もう一度原始に戻って始めることを願わずにはられません。